『方言資料叢刊』の創刊にあたって

江端義夫

１９９１年2月にＧＵＬＦ ＷＡＲが結着した。高度な技術が優先した一方で、対話によるコンセンサスの必要性が、以前よりも強まった。即ち、共通の話題について、世界中が知恵を出し合う場が、どの領域においても、より一層求められなければならなくなったのである。正にこれが、国際化ということの中味であろう。

方言研究ゼミナールが１９８９年に始まった。２年めを迎えた１９９０年に、多くの参加者の中から、「方言資料集」を出したいという声が聞かれた。そこで、方言研究ゼミナールの幹事がお世話をして、『方言資料叢刊』を出版してゆくことになった。

ところで、『方言資料叢刊』には、次のような精神が込められていることを、一編集員として記しておきたい。

1．『方言資料叢刊』は、方言学そのことを目的としたものである。したがって、単純なデータ集とは、自ずから性格を異にしている。どんな一方言事象を取り上げても、背後に、方言学的な理論の裏づけがなくてはならない。故に、『方言資料叢刊』とは言うが、実質は「方言学叢刊」と同義である。誌名の英訳を、強いて REPORT OF DIALECTOLOGY としたのは、理由のあるところである。

2．『方言資料叢刊』の論考には、方言の臨地調査に基づく発表が、しぜんに多く集まるのは当然である。しかし、確かな資料に基づく理論的な仮説や、演繹的な記述が大いに期待されるのは、言うまでもない。「資料」という字義に、狭くとらわれすぎないようにしていただきたい。

　方言研究が実証科学であるかぎり、方言事実の処理を排除することはできないはずである。この点に歯止めがかかっているので、方法は自由自在であることが許される。

3．『方言資料叢刊』は、実存学が基本であり、生きている人間の言語事実に立脚したものを対象とするのが原則とされる。しかし、過去の文献資料の研究を、排除するものではない。又、当然、どの言語のどの方言をも受け容れる認識に立っている。勿論、言語研究と方言研究とを区別することはしない。これらは、人間言語研究として統合されるものと考えたい。

4．方言は対話の中で育つものである。国境を越え、民族の枠組みをはず

し、共通の話題についてcongressする場所として、『方言資料叢刊』が生かされるようであればよいと、希求している。たとえば、世界の方言に関心をもつ人々が、誌上で方言congressを行うようにでもなれば、平和的対話が促進されもするであろう。いわば、congressのトポスとして、これを考えてもみたいものである。

5．趣旨に賛同する人なら誰でも随時に参加することができる。そして、”みんなでつくる『方言資料叢刊』”を合い言葉にしてゆきたいものである。

さて、方言の研究が事実の究明を旨とし、科学と見なされてきたのは、ありがたいことである。しかし、未来への発言とか、評論とかをも含めて、苦悩する人間の諸問題を、方言の側から模索し、提言してゆくことも、人間的やさしさの表明であり、２１世紀に生きる我々の避けて通れない課題ではないかと思う。

編集員の一人として、人間一人一人の幸福のための方言研究を願っている。学問のための学問にならないために、Linguistic Scienceを越えて、弱者のための談話室として、この雑誌が機能することがあっても良いと考えている。一つの例として、それは、教育や政治をも包みこむということでもある。

さいごに、方言の研究で何ができるのか、と問いたい。複合的性格をもつ方言を対象としている我々は、義務として、やはり、結果を人間に返してゆくところまで責任を持たなくてはならないのではないかと考える。

我々の人生が有限であればこそ、『方言資料叢刊』の無限の生命を祈らずにはおられない。